

【書評】

ダニー・ラフェリエール著
『エロシマ』
(立花英裕訳)、藤原書店、2018年

Dany Laferrière,
Eroshima, VLB éditeur, 1987.

西川葉澄
NISHIKAWA Hasumi

本書は、フランス語系世界文学の旗手として名高いダニー・ラフェリエールの、日本語による翻訳では6冊目の本にあたるが、実際には1987年に出版された彼の2作目の小説である。著者による分類によれば「アメリカ的自伝」時代の作品となるだろうか。この作品の日本語翻訳の出版にあたり、「一つの季節」と題され、著者から日本の読者に向けた短い叙情的な文章が冒頭に付記されている。それによれば、本書は1985年に出版された『ニグロと疲れないでセックスする方法』（立花英裕訳、藤原書店、2012年）の「一部として、その中に挟み込まれる予定だった」とある。おそらく上掲書の主人公が、小説内で執筆しつつある小説として構想されたものであろうか。しかし、本書が『ニグロと疲れないでセックスする方法』（以降『ニグロと』と略）の中の挿話として出版されなかった理由は、ラフェリエールの編集者が、本書をあえて独立したもうひとつの作品として出版することを勧めたからだという。『ニグロと』と『エロシマ』において、確かに物語の展開する時代背景と舞台となるモンリオールの街並みは同じだが、トーンはそれぞれかなり異なっている。『ニグロと』が軽快なテンポで進む移民青年の大都会モンレアルでの日々を語る青春譚であるなら、『エロシマ』は湿度の高いモンレアルの夏の数日と、おそらく70年後半から80年代前半のモンレアルの華やいだ賑わいとその絶頂に達した時代の空気を切り取ったものであり、追憶の断片で構成されたようなより詩的な広がりを持つ。『ニグロと』と同様、著者ラフェリエールのプロフィールにも似た男性主人公が、ミステリアスな日本人女性ホキをはじめとする、様々な女性との性的冒険を語るが、『エロシマ』には小説を完成させることで人生の賭けに挑む『ニグロと』のような一貫した物語

は特にはない。何かに至るわけでもなく、感傷的な終わりが来るわけでもない。

本書は16の章からなる短編集とも、一貫した一つの物語とも、どちらにも読める作品になっていると言えるだろう。主人公は『ニグロと』の主人公同様、相変わらずレミントンのタイプライターで小説を書いている男であり、ベッドで生活しているという点で、『ニグロと』の主人公のルームメイトであるブーバを彷彿とさせもする。しかし、それよりもこれらの章を特徴付けるものは、その記述様式の特異さにあるだろう。冒頭に限らず、至る所に、気まぐれに、そして物語に独特のリズムをもたらすように、芭蕉をはじめとする日本の俳句が挟み込まれているのである。例えば、1つ目の短編「カーマストラ動物園」(ホキのアパートのドアに書きつけられている言葉でもある)は、「涼しさを我宿にしてねまる也」という芭蕉の俳句から始まる。日本の読者にとっては、フランス語で書かれた小説が芭蕉の俳句で始まることに対して、漠とした期待のようなものが感じられることがあるかもしれないが、日本文化にあまり親しみを持たない北米の読者の目には、このような緒言がエキゾチスムとスノビズムの混在する、新しく強烈な表現の形式、あるいは呪術的でさえあるような新しい世界への扉として映るのではないだろうか。「訳者あとがき」に記されているように、時として作者名が間違えて表示されていたり、部分的な省略によって表示されている俳句の原典を突き止めることは大変な作業だったに違いないが、フランス語に翻訳された日本の俳句を三行詩として日本語に翻訳し直し、その上で次の行に原作を日本語で併記するという立花英裕氏の素晴らしい翻訳作業により、私たち日本の読者はラフェリエールによって選ばれ、本書に挟み込まれた美しい日本の俳句を、フランス語による俳句の解釈とその原作との両方で味わい、イメージを増幅させることができるのである。

『エロシマ』の物語に関して言及すると、80年代前半のモンリオールでアメリカ英語を話す日本人の恋人のアパートに出入りする「ニグロ」が、芭蕉の俳句をそらんじ、小説に織り込む、という何ともスノップな設定となっている。当時のモンリオールはおそらく、1967年の万博、1976年夏季オリンピックを経て近代的に整備されたカナダ有数の大都会であるが、それは三宅一生、川久保玲、高田賢三といった日本のファッションデザイナーが世界のモード界を席卷し、ジョン・レノンの妻オノ・ヨーコがカリスマ的人気を集めた時代でもある。主人公の恋人として鮮やかにその姿が描かれるホキは、そうしたお洒落で格好のいい、バンクーバー生まれのエキセントリックな日

本人として描かれている。時代の最先端を生きるような彼女の家で催されるパーティーには様々な前衛的な人々が集まり、いずれ『コインロッカー・ベイビーズ』のような村上龍の初期作品を思わせる乱行パーティーの趣を見せる。そこで描かれる日本人女性たちの姿は、ラフェリエール自身が『ニグロと』に収録された日本の読者に宛てられた序文で述べているように、「出来合いのクリシェを多用して」描かれ、ホームパーティーにフグ料理を供し、エロティックに着物を着て、セックスに飽きたらぬ執着をみせている。

『エロシマ』という題名の意味が「ヒロシマ」にあるということは誰もがすぐに気付くだろう。物語の初めからホキとの情交は原子爆弾に比喩されるが、彼女の祖父は原子爆弾が投下された広島に生存者だということが後に語られる。エロティシズムと爆弾のイメージが交互に提示され、後半の「エロシマ」と題された章の中ではエロスとタナトスの神話が明かされる。そもそも本書のページを扉までめくり直して、本書がリタ・ヘイワースに捧げられていることも思い返さなくてはならないだろう。「リタ・ヘイワースへ。赤毛のピンナップ・スターは、あまりに扇情的だったので、最初の水爆の名前にさえなった。」と、物語が始まる前に提示される往年のハリウッド女優への謎めいた献辞は、それが本書の全編を通底する「放射性の女」と外側に向かって／内側に向かって炸裂する爆弾、つまりセックスと爆弾のイメージを結びつけるエロスとタナトスが本書のテーマであることをあらかじめ予告し、エロティシズムと爆弾を司る女神として神格化されたリタのイメージは、広島に関する記述と共に、事あるごとに読者の目前に再提示され、女性と爆弾、扇情的な女性への偏執的嗜好、原子爆弾の炸裂に喩えられるようなオーガズム、セックスと死、爆弾と死に関するイメージとが重層的に織り成されていく。主人公とホキの物語も、ジョン・レノンの死、リタ・ヘイワースの死など常にさりげなく死のイメージに取り囲われている。

ラフェリエールの爆弾へのオプセッションは、より具体的には広島に投下された原子爆弾に対するものであるが、それは本書の構造においても示されていると言えるかもしれない。各章の内部は小刻みにナンバリングされているが、それは150までカウントされたところで、本のほぼ中央に位置するページへと達し、「爆弾それ自体」と題された章に接続される。ナンバリングは再び後半の章で始まり15で終わるが、次のページには原爆によって被災した広島を題材としたドキュメンタリーとしても名高い写真集『ヒロシマ』で知られる土田ヒロミの名前が付記された文章が掲載される。この意味深く繰り返

される15という数字によって、読者は広島に原爆が投下された時間が8時15分ということに思いを馳せるにせよ、それが単なる偶然に過ぎないと判断を保留するにせよ、15という数字が本書の全編を暗示的に貫いている。こうした数字の符丁を持ち出すまでもなく、ごく単純な連想においては、『エロシマ』着想の根底には、脚本がマルグリット・デュラスにより書かれた、アラン・レネ監督作品の『24時間の情事』（1959）が参照されるだろう。周知の通り原題はHiroshima mon amourであり、日本公開時のタイトルも当初は『ヒロシマ、わが愛』とされていたが、『24時間の情事』に変更された。また、この題名も初期の企画段階では『ピカドン』だったといわれるが、まさに『エロシマ』においてもそれを踏襲するように、女性、爆弾、ヒロシマというイメージが共有される。『エロシマ』においては、主人公とホキの72時間の情交が強調されるが、それは冒頭の「一つの季節—日本の読者へ」という序文においても再び言及され、言葉にならない感覚の思い出を昇華できるのが詩的言語であるとし、「あの感興を再び言葉に乗せて浮上させようというのであれば、芭蕉に俳句を詠んでくれるような頼むしかないのかもしれない」と書いている。このように本書は、その偏愛と執着がオブセクションのように繰り返し語られる、女性と爆弾に捧げられた美しいオマージュでもあるだろう。俳句の引用については、後に『甘い漂流』においても、冒頭にエピグラフとして立花北枝の句が掲げられている。『帰郷の謎』においても同様だが、文体における変化が生じ、短い表現のまま改行される詩のような部分と通常の小説のような文体を持つ部分とが混在する詩的散文とも呼べるような独特の文体で書かれている。この文体における「短さ」で表される表現の由来に日本の俳句からの影響を見ることができるとは思えないが、そのように仮定するとおそらく『エロシマ』はラフェリエールの創作における原点の一つともいえる作品であるだろう。

また、ラフェリエールのもう一つのオブセクションともいえるべき「日本」に注目するならば、『ニグロと』の日本語翻訳版の冒頭に収録された「日本の読者へ」において、ラフェリエールが『ニグロと』の作品中に「そこそこに喚起される日本」についての描写の由来を自問しながら、「女性と日本という変数」が彼の全作品に流れる二つの強迫観念だと書いて締めくくっていることも思い返しておこう。そして、『ニグロと』と『エロシマ』はやはり、その繋がりを切っても切り離すことのできない双子のような小説であるということも確認しておきたい。この両作品は双方を読まなければ、露悪的なポルノグ

ラフィーマがいの作品であるという第一印象のままの誤った判断を少なくともどちらかの作品に下すことがあっても仕方ないだろう。そして、この両作品をあえて切り離し、それぞれ独立した小説としたことについては、ラフェリエルの編集者の先見の明を評価したい。

参考文献

Dany Laferrière (1985, 2010), *Comment faire l'amour avec un nègre sans se fatiguer*, TYPO.

ダニー・ラフェリエール (2012) 『ニグロと疲れないでセックスする方法』立花英裕訳、藤原書店。

Dany Laferrière (2012), *Chronique de la dérive douce*, GRASSET & FASQUELLE. ダニー・

ラフェリエール (2014) 『甘い漂流』小倉和子訳、藤原書店。

港千尋 (2009) 『愛の小さな歴史』インスクリプト。